

披沙揀金

八七

			二五	和書門
		九	一七	
	二	七	一	
一	四	冊	架	類

庫文閣内		
五九	二五	和
函	一七	書
五四	一	
架	冊	類

内閣文庫	
番號	和 25171
冊數	14 (4)
函號	159 138



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

彼沙棟金巻身七

明治十二年購求

一 沙度量此廣く法受新の志なりし法事

一 園亦一戦の及保建政宗於大坂 此中と今夜の大軍

の月と逆意のとのなき法事柄結集する候なり

格現極法事と世相なる時、敵を死すまじ

逆意のともなれぬとのありはるすしと思ふさまの

とあり政宗いふと法事とはせん戦事なるの家来

の月と若逆意のとのなき法事柄結集する候なり

敵を死すまじとあると云たりとの法事

中々なる 長切雜記

一 庚子争乱の故景勝の臣忠江山城守兼續の事斬罪は

作付て世の名を多估候事なる言とよ及といふも

東照宮上より具候かの候より存れども先利の事
は下右河完平君見冷泉等あり佐竹の家老小
梅津浩丹あり清津内子伊集院野村新網等有り
りては皆々今友治部少は頼まれりこの主人と
勸りて逆人のさせざる族にありあるは忠に人を
成敗するの語候とも悪く吾等のとせしは先懐て
發動して分むは播磨之へ一物大札を招く堪へ
へん様も亦敬免あるは作出の事は後書さても
くは感へ有り別清之の語を中渡りりては忠に
上洛古軍速清目見成ふお多し上神のみおれお多し射書
う事侍等のの字存多しお多し存出の事今友存多の
御書を右とせしは射書人候りて忠に上洛

名病より作付別真江大和と改させらるる義父山城を
に院在りてせしめり大和ある石山陣等のとくはあり
ありは事をあてし存立大身の家老とも傳へ取り
忠に之を右の通りありては我々の言へりては
とくは上洛はれりては事 玉備候見

一 慶長二年十月十日 内府公儀見の由候より東國へ
由下向は物難十三日佐和山の城へお入は別忠政相成
の侍門者所の前へ存出西野先通く成ははは同を
何れも平伏はは安着人の此様候の申より由國在
りとお候へりては存候はは物とせしめりては
ありては存候はは物とせしめりては存候はは物とせしめり
はは一人存候はは物とせしめりては存候はは物とせしめり

其取込ふ不肝を流し一丈何れやと云ふ事
私儀をさし清目見やと云ふ事
りゆと申上りて若くは身言徳及此のうつけぬめり
あし改もあまんとてかあ所にお宿居立同改
りて改めりし如く波してうたふ事お後信
如し申の門書流多き事丸一う宿ある中未付定
りて作の意不者ありなるべし先腰りとも
若人を附置ゆと申て改めりて居出ゆと申改侍
人昨先別申門未付りし程は若くは但の若人及申
西久敷と申上りて若くは由て言ふ事取ぬと申事
ゆり作しぬり私儀も取付ゆと云ふ事入は程う以後
吟味と信しぬ事者お知事申は礼に礼を信しぬと

取ぬ事申す門腰りをもととり若人等と申付る
事ゆりし申すは申改す給ひいやく左程の儀と云
無く事是程よく知事ある侍に左をとりぬ事
信身新知る石中付ゆ事難き事取ぬと申後先若
ことと申すは申すも申改申中付改も安堵改申事
申改めりしなりね申改清花は此ゆり先徳の是程
よか知行を何程と申すは申すも申改申すは申
事申すは申すも申改申すは申改申すは申改申す
ことと申すは申すも申改申すは申改申すは申改
若年より申改申すは申改申すは申改申すは申改
しる事見し性有清花の名は此は信しぬ事申改申
事申改申すは申改申すは申改申すは申改申すは

信の事履ぬありと改を公任りて者也之清目を
も切て居あり付佐和山の城に清目入の別おれと
も〜の信の是怪只おの〜改を地を住居其の中
作の是怪一人改を〜改〜住居の清目清目清目成
以不審よれお在ゆ在のホ〜中止ゆ付以前の改
と改思石上ゆとあり 海神集

一 細川三秋懐中法帖と〜江あす中なるを〜と
出〜法中付〜とあす自慢〜と

権現極〜出入り階上を〜かやれお大人に不恩との
あり〜と〜とあり〜と也 前稿書物

一 三河守康公清美の清種相の惟ま〜久〜と
以書生ありれ以快氣友の病後の以れと〜と登城

可有との美も月 家康公清美清種極〜極〜
以馳走の用之作付〜既〜為目よあり三河守康公
城あり〜也 家康公の清種相の惟ま〜久〜と
野〜前〜の通〜と清守あり〜と月以別条に清種相と
中上る也よ鼻の形も形もあり〜とまで清守相を
も清守相の形も形も通〜と清種相の惟ま〜久〜と
以書を付〜と〜と〜と清美氣色極〜と家康公中を
百書ら〜作ら〜る〜三河守久〜相快氣中復〜
て今日登城する事我等後足ぶ〜と〜と依〜各
あり道如形馳走を〜と思ひ極楽と中付る也と我
等心よ付〜と〜とあり〜と〜と對面〜と〜とあり
早〜退せ〜と〜と作ら〜る家老中極〜と〜と

見よしくもあつとを苦言して浪舟並と波し見能
極と有い沙汰の限れくれし心ざり惣列大將の
教養好む事とて家内又披露さる見及次第とく
似し物あまの假令の事と人の与る互つ又い大
事ありあつ康は信託とて家康をいふことと思ふ
見ぬ形して心とて對面とて遂るありと語中の者
ととの下意もあつて假令對面の義と止しとて
与るしとて三河とて中野とて一とて因は對面の目
限とて作生とてあまの事康也も一入直次第と思ふ
まに山城ありとて外は幕前のい支度と増りしとて地を
あつて心秘就の沙道具ありとて洋紙作付とて也
岩瀬原注別集

一 権現極尾津の法名清と大名元は作付なる近年
大名知行の事とて前未如之とて清清とてとて
清の殿は清之佐佐上之を持中とて定とて大名元
逆公ありとてその子とて所は大名元とて残は中野
早く改國致し一龜城は合戦の用意可波左右次第
して清近治可ありとて合戦をありとて清服り付
中の事とて國是しとて可ありとて清接院とて由
三左衛門反社名とて大名元とて中野とて大名元
逆公ありとて殿とて如す清服に靈社の年とてとて物言
以て可中とて追付法名清可はとて清とてれとて
三左衛門殿とて中とてこれとて清清可はとて中野
しの上之也 實元傳書

お節と父と自身と討つ事と夜て時節おくれ候事
討つておひやうは是れ若き事とて思ふ候事
若父兄の款をくさし討つ事とて思ふ候事
くさしとて又人とておとす事とて思ふ候事
作只早く討つ肝要とて思ふ事と能合点は下
作ル逸話

一 或時権理極事初より牛多上野分松平氏
学と申す上りて氏務事とて御前中細事と
とあり 権理極の上とて上野分松平氏
於ては約束此とて思ふ事とて思ふ候事
存り身随言譯候事人より思ふ事とて思ふ
いやは存り候事候事家子事方存候事
親見事と目を事とて思ふ事とて思ふ候事

親見事と目を事とて思ふ事とて思ふ候事
事とて思ふ事とて思ふ事とて思ふ候事
後河土産

一 御前ニテ本多上野分申上ルハ松平武藏守殿ヲ
服ニテモ履候三左衛門殿ヨリモ意入ヨク奉公
ノ躰律儀ニ相見候ト云御意ニ武藏守ハ金吾中
納言ニヨク似タル所アリ惣テ武士ハ只リ干キ
成ト云計ニテハスマヌモ人也佐竹カ石田チカ
コヒシ時家來トモニ甲曹サセテ石田カ川チコ
スマテハ夕トモ家康來ルトモヨセツケマシ
トイヒシ此様ナル事武士ノ最負ツヨキトハイ
フモトナリ無性ニ依怙チスルチ最負ツヨキト

そは河部川丁の整昌日記に依りて此後申膳子
衰微の族多し物集ぬりて同少ありたり其
秋より九を傍と此為在許名ハ所方と躍を伴
こゑは成用すおまへに清説は往交思にらる事
手撰抄の若事そり彩り支友波す及をんた合
の衣服まはは傳内一躍をいせは抄。こゑは作名
後府想所とこり刻り支友と世は成内一躍を元
おまへに清説を中しりこの若を梅り衣版は海るとま
此下重ニテ成の躍お海に及九を傍と此為在河部川
町の躍は成の内こりたは心身そり河部川所は抄女
丁の成まはは清不中身の中上りて清説は往交
おまへに清説を中しりこの若を梅り衣版は海るとま

此因右也本男斗此おまへに清説の面々と思はさる
この作し付はれより俄に河部川所の踊を元
抄はそりまはは河部川所一組の大踊を用はる事
幾日た夜におまへに清説は成内一躍を元
人乃まはは中しり名何ら女は成をまをまを
上りぬまはは清不中身の中上りて清説は往交
右の書付し入る抄女は成内一躍を元
まはは清不中身の中上りて清説は往交
名も此抄は成内一躍を元
まはは清不中身の中上りて清説は往交
小抄よりなり抄は成内一躍を元
まはは清不中身の中上りて清説は往交

とあり以糸法かきまきありしやうの返りあり付在
赤糸一巻若松女との倣いつとて法目よとあり
風と可は右時をもくりてししは糸の世例は身
よめては何ともさうするの糸をひきしりし歴々
方の阿部川町よりひきしりしとありし也 階は古産

一 推現様駿河ニ被成御座候時河部川ノ傾城トモ
ヲ被召寄踊ヲオドラセ御遊興被成諸大名衆皆
傾城狂十ト仕心安ク思ヒ付候様ニ被成候傾城
ヲ被召寄候事ヲ御老中イラザル義ニテ候ト被
申上候へ也 推現様御公入御座候由也 旗本衆
ノ傾城狂ハ御嫌被成候大坂没落以後傾城トモ
ヲ被召寄タレト誰トハ知音仕候由一々御聞被

聞候以後立身ハセマイト御意被成候故御旗
本衆傾城狂ハ止申候ト也 寛永聞書

一 推現様駿河ニ被成候時旗本の使士目録止り多クハ
阿部川の松女所へ参りしもさうら酒宴して松ひる
よしお少急な止と作せしれ松は御老申方云と
よ及よと時上意は旗本の様ともふ阿部川へは様のお
糸糸松といひ付たらふ小云といひ腹をさへてその
らに徳代のとありしと何事とていしと別けか
一方は防くしとてさうさうし不様乃お女と云ふ
はものそと若くは女ひしとあり時代はくはな
此言者ど大切しは和俊なる法友とありしと
松ひるなりと古老法らとありし也 校合雜記

一 赤坂のときこそ身代合戦ありとて用事止むは身代
まては若くは代りて代りし由は定め少くは
他代も存せし由は定む元代も多し由は中より代り
を此者も此因の考あり何れも此用し立る事此因
事より此者人数のつめめとて代りかきし事
は作らし三河も此代

一 指現極後府は城より此代は此代此代此代此代此代
成津候人より此代此代此代此代此代此代此代
穉成とのあり秋永此代此代此代此代此代此代
竹茂定より此代此代此代此代此代此代此代
何れも此代此代此代此代此代此代此代此代
道成と此代此代此代此代此代此代此代此代

一 此代此代此代此代此代此代此代此代此代此代
石田治部とて人の大名と出入の候は治部大坂と
互退我と此代此代此代此代此代此代此代此代
義宣此代此代此代此代此代此代此代此代此代
の及中此代此代此代此代此代此代此代此代此代
よ付二河も此代此代此代此代此代此代此代此代
我定此代此代此代此代此代此代此代此代此代
身の一も此代此代此代此代此代此代此代此代此代
右代此代此代此代此代此代此代此代此代此代
いこも此代此代此代此代此代此代此代此代此代
とあり此代此代此代此代此代此代此代此代此代
一 我の代も大坂此代此代此代此代此代此代此代

如斯なることいひあつても通ひふは政一をうさ
きあり秋一は味方とて関系表一は替は彼我ゆふとも
ありとて朝熊も先祖代々此所の領主の故をまゐるあり
後にお遠くもすこし強り多きものなりとて津城といふは
米をめぐら奉りて隨分能くありては津城といふは
いふことのそよふこと思ふ事ありてふふけありと上意の由
あり

一 権現極度府は城よくは夜作の前は他危の内より在
大將頼朝公の故に形のものなり明ちねの極よりあり
一とも平家退付は名代といふこと一のふせとて津
更軍忠をともそよれ一は河も花に保ちては我軍
人の命もいとと殊致は彼れとありとて一うらぬ事れ

中一は五沙流は信りては中より六は能は彼ありと商これ
言一は向じは極つてはもめは彼れは為極上とては
に誰とも存し中よりは通ひも同意の言は信りては
凡一は作あるはそよともは及考は世ととも判官目録
とて一向用より多め批判といふ事ありは朝一は下
とてとらまはしとて人ありとてとて下とて祀あるとて
事ハ代りも優り彼れとてはとて思ふは極れ子とも
よりなりとては男二男といふ事ありとて増てや見事
かとしてなりとては是を彼れとては親族のよみ
とてとてはとて大男よは是を玉那の主とてはとて
ともかとの諸大名よとてとてとてとては是あり

去よりつゝに西も推交身をもりより列て公儀
とうやまひの事とほくしみるに我に成儀あるを
たもるゝして牝族敵として我をまゝと働は法に
は形よりふといふ子や身あるはく見のりし歩の
か小半波重くおれに法大名も一のは重もね
まざる儀あるは依怙具負をもたれおあのは重
に付るといふは天下を治るの心ゆのりあり個
ふ所儀不沙法といふ半に儀あるは身よを果し流罪
かといひい付とも事海にふるも逆をといふ
ありては死罪に就ふよりおに儀は是あり其の浪礼
と考へては民安成に儀と申らるゝあり列玉の大名に
心ゆに天下をも持ちの心ゆに大なるをかりある事

なり新朝の何とていふよとあるづらんと
上なきよありゆとふ利 殿河と産

一 安長十二年九月廿日有度揚大綱玄兼勝初修寺
申納云光豊衣西信養より春日若文あ新のゆ
折道古来より天下に出来多るの由は申を待
大津所縁は作ら志の兩社より建立以後教年を經
の上の折折るあよ何れに 將軍敵く稱へ修造と
ねらひをの由は作せりあり 萬徳集

一 安長十九年春日野神木子本折とより是六年
東一宮敵はし修造と志后との勅使結らして下るふ
大神志作らるる若るの社既なる修造なりと
そ本より江戸將軍より修造成るべしと渡養之武野
昭彦

あつて安んずるを至上とす何の不足もあらず若かり
とえかとの口よりたぬの事と申すてよき事あり
ゆゑの上をよむ法度持の才速感いふこと也
少下をみるれ候とみるゆとあり 駿河と産

一 十月朔日京都板倉伊勢守勝重より大坂城孫友の由
早馬より注をよよりと申渡觸る尾張極く改悪
白と葵の丸付と申す旗本中尾徳平白と紋付と申す
大田守之全の公並此申す平二川の山幕を名に用ゑの為
駿河は尾張と先まじり候なり新室君へ思ふは紋
付と申す白旗と申す中尾の山幕は馬車に兼田勝家より
見事ふれ口をわたりと申す山幕と申すを七中此白旗
と 秀忠將軍家同士の事あり尾張の山幕候

阿龜殿の清前へは右山行候と申す情事と申すは在系
信殿の山見と申す久ふと申すりたる山旗と申すは
常陸女極へは江戸此 將軍様は同を七中の白旗を
はを事と申す無曲を極へは常陸女極へは進出候なり
山見と申す地へは在を情信殿へは申す事と申すは
と申す恨事と申すは 東照宮清教色遠と作は成殿と
想候は庶子庶子の想候といふ事あり我嫡子は清二郎
信康生官の及二男ありは誠意門秀康嫡子と可
と申す事と申すは同候の事あり常陸女へは腰の事阿
と申す事と申すは天下の想候は常陸女若くは在を情は常陸
と申す事と申すは格は同事と申す勝劣ありは右より
長正年八月十日よりは我山右在を兼登送は位下新室の

常陸外従四位下に叙爵より同十二年三月より在る
智も常陸外も冬誠中将従三位に補任を是と見れ
る在る常陸外家も勝劣あり物れとも河内路を
小柄の想成式に常陸ありや此路を女の出
る事上りて河内路を流る新直君作の尾流の
家と此方の年角あり物ありは流る尾流此
家と交りて相毎を流る事沙汰の限りとは河内
我部天下に流る流る流る流る流る流る流る
不及り江戸小柄事無り可なり酒之也 紀候言
新編
一 後府より 家康公大坂秀頼公逆分にお極勢城可
は成る事在る在る例の在る流る流る流る流る流る
取おれと秀作身をたのむ事流る流る流る流る流る

た、このとより、流る流る流る流る流る流る流る
秀頼公逆分 秀忠將軍様 家康極大坂表
流馬は出て討果を流る流る流る流る流る流る流る
流る流る流る流る流る流る流る流る流る流る流る流る
諸人及取流る流る流る流る流る流る流る流る流る流る流る流る
一 権現様御出陣前二ハ必法間ヲ聴セラレタルト
也大坂御陣前法間ノ半ニ佐竹着陣ヲ由到來ア
リ御傍衆法間ノ御座敷ニ参リテ申上ル兔角ノ御
意ナキニ付亦申上ル其時御ニラニ被成候法間
過彼者ヲ被召出法間半ニ申上御叱リ被遊タル
ト也諸人ツモリニハ大名ノ佐竹御味方ニ早々
参候儀可為御悦ト存候也其色モ無之右ノ通也

一 大坂ノ時 権理様伏見ニテ御馬召色々ニ御達者ヲ被成トテ諸大名衆へ御見世ナサレ候テ御年ハ寄ラセラレタレトモ七歩立テ上御達者ヨソナラセラルニシ御馬ニテノ御達者ハ若キ者ニモ御ヲトリ被遊回敷トノ上意ニテ諸大名ニ勢ヒテ御付被成候トナリ 寛元御書

一 十二月二日 大寺所法寺の住持巡見有之とて本多佐渡守成瀬某人の正安及平の如く右連らぬ友重佐渡守と陸へ入るや小室掛と名を以て寺前に立自今嶋を多々執りしる事にて陣中より強抱と云ふに御書おおと小儀と云ふの捕と獲とを云ふは公令と云

夫より何れに取れしと云ふに密掛にみづ右よりと云ふなり
 相あうらひするよ右も池田官内少輔忠雄と陣に立寄
 夕の城を是と云ふや強懸と云ふは
 諸卒少くは水付小取付とありしに
 横田某者勇を以てうつあつと云ふ者
 殿に中しれども此際にてあつたふと云ふは
 夕の陣治かき陣に控ひしに
 衆より河波も陣へ入るは強抱一も不
 志者も切者ありし人皆感心し

吳中太政記

一 大坂ニテ 家康公御順見ニ御出アリハサレ候
 秀忠公モ折節御順見ニ御出ナサレ 両将トモ
 二堀ノキハ 御寄被成候タカニ御見合ナサ

レ候へ厄 両將トモニ御退不被成故 家康公ヨリ 秀忠公へ御使ツカハサレタカハニ引入タマフ其後家老衆 家康公御前へ被出御煩見人様子諫申上ラレケレハ 家康公運ノ矢ハノカレ又者也天下ヲ治ル上ニテアノ足輕躰ノ者ノ矢ニ當テ可死ヤ矢ニ當テ可死程ニテハ中々可治天下ニアラスト上意ニテ其後御羽ノ兩ノ御袖ヨリ鉄炮ノ玉ヲ十計程ツ、取出シ各へ御見セアリハサレケル奉感入之由或人ノ物語記之 久世本翁物語

一 冬降龍珠の中多あり流大坂城近了付く 大津所様
此は往々大坂陣中よりむうい大角ともいふは後見は成り

と云城陣より大角と見えけ 家康様は蔵山産物
大角と云けり中より兩のともいふは後見は成り 大津所様
此一降は家老の陣に後見は成り後見は成り
主時中多上り大坂 大津所様一上りるは此は
大角小角余りし者くりるは馬は此は此は此は
大津所様此は此は此は此は此は此は此は此は
此は此は此は此は此は此は此は此は此は此は
此は此は此は此は此は此は此は此は此は此は

一 大坂陣より 神君の系白山一山登り此は此は此は
後陣と云ふは此は此は此は此は此は此は此は此は
所へ此は此は此は此は此は此は此は此は此は此は
かや中より此は此は此は此は此は此は此は此は此は
上野此は此は此は此は此は此は此は此は此は此は

ふれ成りし名古屋よりその作中なるを時分名古屋
一併に下りし作付とせりしとて後上り者頼之に
此見と成りし事 諸士軍談

一 大坂より伊友丹治等青木民部少為忠使後府(幸向)に
秀頼此母より大坂より一信為正榮後府(幸向)に
右忠使の口上去年ふたの就逆礼治等頼之に
田島換亡因信為治人諸將難事此後別と母等
就候しと恩を以て 家康様此恩を以て扶持は友の由
此冊之由會和し去年既し此冊を以て九智し上大坂此
抱を法浪人此放扶持せられ向後右の浪人難為一人
兩津所縁此抱を推る要り由此約儀の事し於今浪人此
扶持の由有る上この通追の儀を修めりし事なる

金銀の儀不足はりますと奉入れば等の儀は難後早
くは作出の通て尾羽我輩等の儀は燈籠のお教へて境節
小川あゝれ徳守二人の女中元と百等及此恩を以て
人、名護屋へてお候し極し伊友丹治等青木民部少為
家康様一紙紙 家康様と治所を以て 家康様
名護屋へて紙紙を以て後上治所等の事し此は後上治所
遠境の儀は諸事此等川維と成り 家康様
此光表は極みの事し上治所成りし事し此は後上治所
此拓は遠しお後上方面の代友とせ右等此御成の事
ては作後の旨は作出在り使後府及是の事月日
家康様後府はを後尾羽此紙紙此後上治所の事
此時去年為年及度此出する事此後中及固窮の事

少くは勝成の儀をさすべしと名批判の如く本多上野公
因之取りをのりしは席下におろちや旅は旅を更て其後
少ははる時若く及之上の由を察し或は油此より
お清は先中と為る種くはお清此抄よりお阿ちや
冠様風味よりよりより三方より裁く清前(持別)一
去年此は本陣首尾よくお惣定小目お及出来り
因又近日名護屋は敵は候とも中上より子猫軍統
領より諸特^侍へ何れお候ては作付代此由中上より外
清城嫌俄に控へては作付の諸士(中下)お此は合上
の前より今又中下より款より忠怖は抱はる氏より
唱て中全浪ふ中下より通迫は能勤は供儀は
公及事てはらゝ家康様は揚子より中全とては極は

古軍制有は先を別名薩は一戦此時分も人数をとも
は形ふは在位長此人数をえりしは是は別更は遠は
勝利は或はお州小田原の時もは抽は粉屑或は徳川
岡原は合戦前とふは為難人刀以討象は其は勝利
ゆよりは是等の事は是は江の介は忠怒あり
お阿ちやを討ては目お度とて中中上退おへ勿論お
多上野公は其の角より發言儀はるる 村鐵道伴覚書
一 大坂出陣の時秀頼方よりお阿ちやを討ては其は
人形を作り 権現様と呪咀はる候御人ありを罪し
お阿ちやよりとては言 神祖の上よりお阿ちやは其
山伏の形に騙しとて人よりお阿ちやを討ては其は
取為るる事也我亦より騙しを居くこらせり

秀頼を呪世せしめ又た殺すべしと謀等々
も勝りてはさうに成運少くは下は控を捕ら
しに威まじきを皆命を助け退拂せよと作書
はあ中人の称道とも一命を助りたる徳に寛仁大
度の名譽ありと日向を信老後其物詰ふせられ
ありと

明良信範

一 伊勢より大脚戸の事を更にお大周より秀頼に代りあり
此の事は脚ありきと懐く大坂陣の節清當家の
清父子極を頼依はれとの報おきしり付主廊の山田
奉引日向を信老中野内宛兩人方より信老を遠
めりし事の中野内宛ありし付を月廿六日午に入
は信老の候にて中野内と破府にお付りあり

権現極上を了す夫は在りしもの御遠ひして無理感付
極とて思在り秀頼運せりうき少れし事新侍を
あちか戸部と似合する事之早と出陣中付欠不渡
御色をもお遣返すを極とて作書と也 破府に産
一 大周の代り信老とて鳥極を洗ひし中男と取立料理
人し事付を後料理人の代り秀頼の代り成りし
信老の代り成りしもの事とて信老とてはさうの事大角
兵左衛門とて者なり 此を信老の逆心波に一月ちよむり
取手下のもの事とて信老とてはさうの事大角
右近を此働さすは事とて信老とてはさうの事大角
新の在中野内宛ありし事とて信老とてはさうの事大角
大角めり事とて信老とてはさうの事大角

一 大坂御陣ノ以後於駿府御城或夜御咄ノ衆へ召
出サレケルニ 家康公仰ラレケルハ我等事各
モ存知ノ如ク天下戦國ノ最中ニ生レ年若キ時
ヨリ明暮合戦ノ評儀近心身ヲ勞ニ学文ヲ勤候
事モナケレハ如形文盲ナリ然レ凡只一句ノ要
文ヲ聞覽テ是ヲ常ニ心ニ忘レス参州固崎ニ在
城也昔ヨリ天下一統ノ今日ニ至ル迄件ノ一
句ノ道理ニ依テ當家創業ノ切ヲ立タ叫扱右ノ
一句ト云ハ聖經賢傳佛語ノ中ニイツレト書ノ
内ニ如何様ノ句ニテ可有ヤ其方達考テ見ヨト
仰ラレ其時御前伺候衆ノ中ニテ覺文有之面々
是ニテヤ御座候彼ニテヤ御座候ト色々ニ申上

ラルト云ヘトモ夫ニテモナシ夫ニモ非スト
仰ラレケレハ各最早存寄モ御座ナク候ト申上
ラル 家康公仰ラレケルハ只今各申見ケルハ
皆是四書五經ノ内ニ出シ聖賢ノ詞ト聞ユレハ
勿論文道ノ要文ナルヘシ然トモ我等ハ文盲ユ
ヘ左様ノ事ハ暇ト聞タル事モナシ去ナカラ仇
ヲ報スルニ恩ヲ以テスルト云一句ヲ若年ノ時
ヨリ聞覽ヘ常ニ心ニ忘レス大事ニモ小事ニモ
用ニ立事カ多シサレハ文秘文ナレトモ今日各
ヘ相傳スルソト仰ラレ御笑遊サレケルトナリ

岩淵夜話別集

致シ其自ニ給リ人々ニモ振舞候ト申上レハ以
ノ外御腰立被遊御臺所方へモ御吟味ヲ被遊ニ
弥其通十ハハ大ニ御機繰換シ御自身御手計ニ
可被遊ト被作付御長カノ鞘ヲハツサセ給テ廣
緑ニ被為立鈴木ヲ召出サル久三郎モ致覺悟少
モヒルニ夕ル氣色モナク畏候トテ御路次口ヨ
リ罷出ル其間三才間計モ有之ニ家康公鈴木
不届者メ成敷スルソト御詞ヲ拭サセラルレハ
久三郎己カ刀腰指ヲ拔五六間モ跡へカラリト
投捨大ノ服ニ角未立申ケルハ柳魚鳥ニ人間ヲ
カユルト云事カアルモノニテ候ヤ左様ノ御心
ニテ天下ノ望ハ成マシク候我等カ義ハナサレ

度様ニ可被成ト云テ大肌脱ニ成テ御傍ニ近寄
所ニ家康公御長カヲ捨サセ給ヒテ最早ユル
スソト仰ラレテ其終御座鋪へ被為入則久三郎
ヲ召出其方忠節深キ心入ノ程感入満足ニ思フ
故先日鷹場ニテ鳥ヲ取城ノ堀ニテ網ヲウケニ
兩人ノ歩行人者トモ近日曲事ニ行ハニト思ヒ
押籠テ置タリシヲモ兩人共ニ只今故免スルト
被仰ケレハ久三郎泪ヲ流シ私林ノ寸志ヲモ如
此御取立被遊候ハ近頃有難儀ニ御座候備ニ天
下ヲモエ口シ召ルハキ御瑞想ト奉存ト申上ル
也 岩園夜話別集

一 控現様涉種相煩出成ハ膿を中為取トテ捨具を為テ

此病一発出先年我等腫物を療治は時を失
薬を以て付成りたると中上と云ふ一圓同心に
控りては作らる腫を立扱ひて 殿はむさ
しむる療治をのぞいて大にとある事備
しむる中上進頓悟を以て余をすまへ最
早ふくし中上作らる腫を立扱ひて 殿はむさ
と入る中上作らる腫を立扱ひて 殿はむさ
此病一発出先年我等腫物を療治は時を失
薬を以て付成りたると中上と云ふ一圓同心に
控りては作らる腫を立扱ひて 殿はむさ
しむる療治をのぞいて大にとある事備
しむる中上進頓悟を以て余をすまへ最
早ふくし中上作らる腫を立扱ひて 殿はむさ
と入る中上作らる腫を立扱ひて 殿はむさ

大事なりしは其方物に成る息災とてあるがうら
差を者有る心と付りれし可成り少故何の没ま
立ぬ先腹迄版せ切ると云事やマなると以て延を時
他在者門中といやと云下 殿は申すられし事
もくはしむる人々も依ての成りては我等かごと
今年乃其も云事と差くはし 殿は拵成無分別
かの人乃以て彼てもいられぬ物とてりとも其は
八十よ及び差を以りりの際此陣は以て信を伝
行目も切つふされし乃拵成ると切とぞいりし
ちんを成りて世の人れうも云ひあむを成る
一人してあらけりし世の常人衆の事成りて
かくしれ今日迄 殿乃以情平して以中

神君沙種也平愈の由成りて 法川家へ寄代は
良將あり天是く為る事成候へんと思ふ由も
神事 神君の言より建し殊に感慨し今も
云云 紀州根来由緒書

一 兼康公駿河は沙江時大車より有之より依り
本多佐渡より作付の重て大車より者切腹
て作付の男よりお福より上意より佐渡も沙最
より退き相之朝定候と波り一時は作付より
川より上意也佐渡より云漢之思業はり候候
可成り奉候ル子細に表裏て井伊公初少如く若松大車
由り決して切腹に就て作付より人より徳平乃
小身成者より作付強成者より作付時沙法度

不正直よりて難立故に世臣時より申上度存り凡
どもこのらぬ義其上深分別に申上り申候今度
も侍兼ル由りより殊に沙感念に任事止め
あり 兵用

一 安長四年法大在石田法部少輔と殺入りし事
あり是は法部少輔と申候に危多き由り 神君
之臣と申し候事いふてありと思はる申上候
申上候法部少輔と申候に殺入りし事申上候
只今法部少輔申し候天下の老法部と申し候
申上候申上候法部と申候に殺入りし事
清前様と申し候申上候申上候申上候
申上候申上候申上候申上候申上候

ムシカウエナト殊外塩辛ク御座候故而々人如
ク年寄モ物モ下サレニクキ様ニ候俣増テヤ若
キ衆ハ一口モエ夕ベ申サヌ如クニ御座候故私
方ヨリ御賄リ常見近度ニ断テ申遣候ヘトモ聞
分モ無御座候其事ヲ只今御次ニテ常見ノ情ノ
強キヨトテ何モ笑候ト申上ラレハ家康公
聞召テ夫ハイカニモ何モ致迷惑モ理リ也此後
ハ左様ニナキヤウニシテトテモソト仰ラレ
御表へ被為成常見ヲ召テ仰ラレケルハ臺所ニ
テ申付ル味噌香物ナト塩カラ過テ奥方ノ女ト
モ殊外迷惑仕候由ニ候間向後左様ニ無之様ニ
申付候ヘトノ上意ノ趣常見謹テ兼リ脇指ヲ板

キ御側近ク参リ御耳ニ口ヲ押當テ何マラレ暫
クサ、ヤキテ申上ル家康公モ御笑ナサレナ
カラ歩ウナツキ給ヒ兎角ノ仰モナク常見ハ御
前ヲ罷立又御前伺公ノ象何事ヲ申上ケルニマ
ト各推量ニ及ハス程過テ或人常見ニ其様子ヲ
尋ルニ常見答テ云別ノ事ニモ非ス女中ハ惣シ
テ大モノナク夕ベ夕カリ申候唯今近ノ通ニ塩辛
ク仕候テサヘ大分ノ味噌香物ヲ下サレ上意ノ
如ク塩加減ナヨク致シ夕ヘサセ候ハ何程夕
ベ可申モ難計候左様ニ候テハ年中ニ過分ノ御
矢墜ト罷成候間向後トテモ女中方ヨリ内々ニ
テ申上候壁訴詔ナトハ必御聞入遊サレ候事御

此方思慮あり及場所とて今之に格別と包むるを感
ずるに 逸話

一 後府の沙汰に於て 家康公沙汰に此丘上之有るに
凡主人は悪事ありを見て凍を答りて家を裁場
として一善徳を察しとるも遂に悟りて心を成しと
思ふ子細に融し向て良道をとりも仰命せりといふ
外ぬ事あり地とも情厚の時運来あり人をも
討人も討るも物之縦死と遠ても未代迄養ひの意を
残し主人も惜しむれぬと死て未だ其の所あり
人は合好し人と討時之氏造者の名をとり主人の感懐は
形りて恩賞を賜へ家と富子孫繁昌せしむるに
も成事少しは裁場は持て死ても生ても損なりといふ

積りあり扱又主人の悪逆不道ありを悔みて凍く凍を
と致しとるすう九も止まあふ外に勝負あり子細に其
主人悪事を好む心あり言事を嫌ふ者も古人も良業
は苦く金云耳不逆しと云を妙く主人の悪事ありを
見ぬるに善行無見と云家老と常の陽かとして
傍に逃げぬ振と致しとて裁時につらひはしやゆとを
しとるも善行ありのうり者者中今て作の家老の筋に
上りてさうも有る事も觸れて流しとてさうも人それ
信し思ひて隔心の上目見を悪く之善時といふ成者も
不足を辨みまを見限り跡を心出来身を棄てて所捕を
して異見を止め式流高を致して刃込隠居を致し
しておふりもいふて各別を致しとて十人十八人今てい

と通す也物もふま人の機知はあふとと操る人乃好此
長く者道の守り主人乃思事成申面本其責我
一人ノ帰るるありと分別と定ぬ身の上成忘れ羨望も
いひこひと争ひ諍ふ妙くある家老の徳も主人のよ
手討も争ふ又の押籠らるるも何上と果し命をまふ
妻子也可迷惑も及事必定なりまを必考みれ我情
の一畝塔の却る致し易る道理をいふるもいひの上之
是も争 家康公流松城も沙彦と成りし時或夜中多
仕酒を介振る人沙用の美より沙彦の在りしを割
わら一人沙彦より鼻紙袋を明け一通の書付をある
封を切て自由沙彦に持参して指上 家康公沙彦
と成文の河をいひ沙彦もあはれの内私取寄り美ともを

書付並に名探沙彦指し可成くと事取寄る事とされ
扱ふれい争持成心入れと人沙彦感と成仕渡書いあ若
也と也丁々流して聞せよと御付らるる沙彦畏りて教
条の書付を讀修ふ一々条もみ終る前よ此事
沙彦移し任是より限以て後とも存寄美もいひは
少も金を意立聞せよと上意され沙彦在成仕渡書
示し争ひく纏て沙彦と相討せよと沙彦を争仕渡書
和沙彦用して面も残る在りたに 家康公御付ら
只今此方の流字せけら書付乃取々如何いふも沙彦
丁中仕渡書は清上一ヶ條と沙彦乃沙彦用も立言と
存事とも争ひ指し争はれし事と 家康公沙彦を
争せし也といひられあの前れ分別一畝を書付し

ものふれは妙在もかゝる我等心持し成程乃事ふをけ
ととも思ひよりて因し書付を潤懐し細空て特節哉
見合せ我等よんせんといふ心何ふ多し人解し去
事ら用は多てふ取用よちねらしらね也てこれいれ
想て我と我例乃過に初らねとみなり然も亦成
者心めら友道傍事存友たるとみふれは身は乃
上の思を言て吟味穿鑿を遠ら故に手前め趣事と
んふえんれと改味し事多との也是は小所の法を利
極又大身は何れと推高き物とて友道明友を合せて易
く語らへる程とみふれは身乃は趣を吟味するといふ事も
か一日夜朝暮乃相え他は皆家来ども斗ふれは
大方此事をいふ心とあつてふ言はばを依てせし

語りの語りとともいふは語りとともいふを改めんとし
心と付してしてさる事多しとの人は是は必竟大所乃
損しともえつて凡人乃よまゝと下の陳を聞する者
の國政を心の家と破らさるる古今共々と作りら
依はる来り負はるる或時子息上野のみ語り聞せ
るは落後し及上村のみ書付如何信の文言とていふ
能くも人の誰うていふは國は信も書付てい書付は
文言と具しともえつてさるる何の用ふ事とていも
はしとていふはさるる也 若何信証列集

一
いふ一階府北は城 大権現極は城一上之了曰凡人
乃為事と見く誅をいふは時の歌老我場とて一書録
を案しつるも違つていふ心をいふとていふ事海

欲よりふとくも武造と云る子才余を憐れらるる事
なりと云れども情願一時の運次あるれんをもうち
又人をもとくもつるものありたしくお死と違ともま
の世ふまへん乃名を残し一人も惜まれと死するも
年長の事あり又は合して人を討取るといふ
篇者名をとりて主人に感懐はれりもう(恩堂を討て
我まとも子孫無昌れしものも成りて我場乃を
まの世に下もまともも損のありはまりあり扱又主人の
趣逆たふとくも悔つてつとくも悔とていふ
十九もとあかき情願あり子細にまあるを好む
心より首を嫌ふ差をいふ人と忠を逆年利行の良薬
若に利行病といひていふとくも一人に如く首を見らる

一とせぬ見んをいふ事先をたす満をてて行り
近付く依る居つて追従をえと云ら出来出の感
ある者れと合て情の家光れ才のうとを如く扱主人
とりらて事ふとくも後をまるといふ事
涙と口ひびく満心れうよりいふ有危あ〜〜女を扱
やるあるものあといはれ是をいふとくもみまを見らるり
うとくもいふ事ふとくもいふ事いふ事いふ事いふ事
或は情の病をいふていふて又いふ後をいふいふ
おふもいふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
ありあつるふまの機嫌あ〜〜いふ事いふ事いふ事
長〜〜いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
責見れ人いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

とくく大悲此後をば敬一人を討て佛敬神敬と
 り此降伏せしと也是よりと要く亦しとこれ
 ちよ法感をもと誠よけ美名理ふらむとすはせと
 園る系不徳引しと心の自他の我死のよと過を懐り
 殺せさるしみしと昂きもむしと後三所大樹寺もとく
 降る法義又重血脈をたしと交濟しと心稱名六
 万造の日課我場もと尚おこしとすもむしとと
 かの傍に傍に觀智國師と申せしと新着書集
 一 大坂出陣の時大和比下ちとラガリ峠を以て城敷りともしりとも
 中らに古よりラガリ峠を城とて合戦に勝つ事外
 城といふ昔此例を今もと各軍に教りしとラガリ峠れとも
 是は押捨ふあせたりと押通りも成りとも也 徳土軍法

披沙揀金卷八終

新加坡金卷八



